
ポケダン～頭の中でふと芽生えた短篇集～

るり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケダン＼頭の中でふと芽生えた短篇集＼

【Nコード】

N35770

【作者名】

るり

【あらすじ】

空の探検隊をやっていたときにふと頭に浮かんだ内容を小説化してみました。

1篇5,000文字ほど終わる（予定の）短編にしては短すぎる短編です。

オムニバス形式で、1話完結型です。

空の探検隊での主人公、ロコンのココロと、パートナー、イーブイのイルが時々出てきます。

1st マイナン（前書き）

仲間がほしいマイナンのお話。

1st マイナン

僕はマイナン。

孤独な一匹オオカミで探検をしている探検家さ。

最近、トレジャータウンの近くにパツチールが営んでいる「ぐるぐるカフェ」というものができたらしい。そこでジューズを飲むと、たまに仲間ができるらしいんだけど……。

僕は、一匹でも探検できるほど強いんだ！ 仲間なんていらないよ……！

……と思いつつ、とあるダンジョンに入った。――まではいいんだけど、そのダンジョンで初めて「モンスターハウス」とかいいう小部屋に入り込んでしまい、コテンパンにやられてしまった。

そして、気がついたらダンジョンの外に放り出されていた……。体中がギシギシと痛んで、しばらくの間まともに動けず、その情けないことと言ったら。

「……やっぱり仲間が必要だ、うん！」

とは言っても、ダンジョンで仲間ができるのにも関わらず、あれ以来ダンジョンに入ることがトラウマになってしまった。

――入ったら、この間のようにまた袋叩きにされてしまうんじゃないか……。

そう思うと、身がすくんで動こうにも動けない。

そんな時、近くで話し声がした。

「ねえねえ、聞いて！」

私たち、ぐるぐるカフェでジュースを飲んでいたら探検仲間ができたんだよ！」

「へえ！ よかったねー、ココロ、イル」

声の主は最近プクリンのギルドに弟子入りしたらしいロコンの「ココロ」とイーブイの「イル」のハチャメチャコンビ。そして名前の知らない誰かだった。

——『仲間ができた』！？

「……そっか、思い出した！」

「……ココロ、あっちに行こうよ」

「そうしょっか……」

6つもの目でジトーツと見られた結果、離れた場所へ移動された。

……あ、そんな、ちょっと。まるで僕が変な人みたいじゃないか！
少し大声出したからって、ずっと君たちを見ていたからって、そんな避けるように行かなくっても……。

ただでさえ落ち込んでいるのに、ますます落ち込んじゃうじゃないか……。

……仕方ない。

「今日は気分を戻すために、家に帰って寝よう！」

？ なぜ周りの人は僕を遠巻きに見ているの？

……まあ、いつか。帰る。

次の日の朝。

僕はぐるぐるカフェにいた。そして、パッチールに「ベトベタフ
ード」を渡してジュースを作ってもらった。

砂漠に何度か行ったし、変なスイッチ踏んだ時にできた代物。た
くさんあるんだな、これが。

この代物は食べると状態異常になってしまう以外に何の役にも立
たないけど、パッチールに（食べられるものなら何でも）渡せばジ
ュースにしてくれるらしいから、ちょうどいいや。

「マイナンさん、出来ましたよ」

「わあ、ありがとう！ いただきまーす……」

「お味はどうですか？」

「……ごめん、パッチール。口で言い表せないくらい、まずいや」

と言えないような笑顔でこっちを見ないでくれ！

「お、おいしいよ。パッチール。」

さすがパッチール、ウワサどおりだ。あは、あは、あはははは」

「お褒めいただき光栄です」。他に何かいかがですか？」

「……いや、もう要らないです」

がつくしと肩を落として出口へと向かう僕の耳に、こんな会話が聞こえてきた。

「あそこにいるあのマイナン、パッチールさんに何渡したと思う?」

「何、何?」

「『ベトベタフード』さ」

「うわっ……」

それがなんだよ?

「それで作ったジュースはワースト3に入るのも知らずに?」

え?

「そうそう。それも初めて利用したらしくってさ」

「うっわぁ……」

「かわいそー……」。

最初からあんなまずいの飲まされたら、二度と来る気なんて起きないね、ボクは」

「ワタシもよ!」

……頼むから。頼むからそんなかわいそうなモノを見るような目で見ないでくれ。

すでに落としていた肩をもっと落として、僕はカフェを出て行った。

それからというもの、僕はけなしのリンゴをパッチールさんに渡し、リンゴジュースを作ってもらっていた。

パッチールさんの腕前は、その時その時で変わるようで、ものすごくおいしい時もあれば、普通の味の時もあった。

でも、一向に仲間となってくれる人が現れない。

そのうちにリンゴのストックがなくなってしまった。『リンゴの森』というダンジョンに行けば大量に手に入るのだけど、ダンジョンに入るのはまだ怖い……。

だから、今度はグミを。

それがなくなればオレンやモモンの実、クラブの実という風にするものを木の実に変えた。

しかし、グミも木の実もあまりストックしていなかったせいで、数週間ですぐに切れてしまった。残ったのは、さまざまなダンジョンをめぐり歩いた末に、ようやく見つけた黄色いグミ1個だけ。

「さすがにこれは、なあ」

「おい。頼まないなら、そこ退けよ。邪魔だ、ジャマ！」

「え？ あ、ゴメン」

変に絡まれるのも嫌だから、カウンターの前からさっと逃げる。彼らは目の前で、僕にとっては超！ 高級な黄色いグミを3つもパッチールに差し出していた。そして、出来上がったグミジュースを豪快に飲み干す。

すると……。

「いい飲みっぷりですね!!」

「ん？」

たった今ジュースを飲み干した彼らに話しかける、1匹のパチリスがいた。

「味がわかるそんな方に私はついていきたい……。構いませんか？」

「……オレは構わないけど、みんなは？」

「リーダーがいつていうのなら、拒否する理由なんてないぜ」

「右に同じ。パチリス、ボクらと一緒に行こうぜ」

「ありがとうございます。これから頑張ります」

そ、そっか。この手が、

「この手があった!!」

性懲りもなく、店内で叫んでしまう僕。

「い、行こうぜパチリス、リーダー」

「そ……、そうだな」

頭のおかしいやつを見るような目つきで見られたけど、僕には関係ない。

関係ないったら、

「関係ないのさ！ はははは——」

「お客様、お静かに願います」。

もしできないのなら、さっさと出て行ってくださいね？
そして、2度と来ないでください」

「……すみませんでした」

それから毎日のように、僕は何をするわけでもなくずっとカフェに居座り続けた。

あの時のパチリスのように、探検隊に話しかけるために。

「ん……。やっぱり僕と合いそうな人がいないなあ。

1人で探検している人で、同じ電気タイプがいいんだけどな」

仲間に入れてもらう側のクセに、要望がいろいろあるのは気にしちゃいけない。

「あ、あの人にしよう！ あ、あの……」

僕が話しかけようとしたのは、今まさにジュースを飲んでいるメスのピカチュウ。かわいいし、ね。

「いい飲みっぷりですね、ピカチュウさん」

おい！ 誰だよ、僕より先にお嬢に声をかけるのは！

「？ あら、あなたは？」

「申し遅れました。私、こういうものです」

な！？ ポケモンのくせに名刺を持っているだ！？
許せん、あのピクシーめ！

「まあ、ピクトさんとおっしゃるのですか。

それに、とてもいいところのご出身なのですね」

「はい。どうでしょう？

僕と一緒に暮らすのは。きっと貴女にとって、とてもいい暮らしができますよ」

き、きいいい！！ なんだよ、なんだよ！

ピカチュウお嬢はそんなことには釣られないぞ！

「喜んで、お引き受けいたしますわ。ピクトさん」

なあ！？

「それではいっしょに参りましょうか。私たちの住む城へ」
「はい」

……お嬢。あなたはそういうお方だったのですね。

ふ、フフフ。ま、まあいいさ。

あんなピカチュウより、もっといい女^{ひと}を見つけるもんね！！

それから数週間。いや、数力月は経ったかな？

僕は未だにカフェと一緒に探検したい人を探していた。が、僕の理想に合う人はなかなか現れない。

現れてもコンビだったり、グループだったり、とにかく1人ではなかった。誰にも連れがいた。

それはボーイフレンドだったり、仲のいい仲良しグループだったり。

早く別れちまえ、ケンカしちまえと思っても、そう思い通りになることがあるわけでもなく、ただ毎日をイチャイチャしている奴らを見ては、イライラしながら過ごしていた。

「ああ、もう！」

閉店時間になり、今日も巡り合えることがなかった僕はイライラを声に出して発散する。

「まだ理想の方を探しているのですか、マイナンさん？」

長期間、居座らせてもらっているせいで、僕の目的がパッチーにすっかりばれてしまっていた。

「そうだけど、何か？」

「いい加減、あきらめるか、理想を下げるかしてもらえませんか？それがジューズにする材料を持ってきてください」

やだね。

「だから何度も言っただろう？」

食べ物はすべてジューズにしてみましたし、あきらめる気も、理想を下げる気もないって」

「なら、出て行ってください」

「嫌だ。ここでしか仲間ができないんだー!!」

「依頼を成功させてでタマゴをもらうか、ダンジョンに行くかをす

れば仲間ができるはずでしょう？」

「分からないやつだなあ」。

そのダンジョンには、トラウマがあつていけないんだってば」

最近、いつもこんな感じで追い出される。閉店時間を過ぎているからから当たり前と言えば当たり前なんだけど……。

「明日は来ないでくださいね」

「明後日なら来てもいいんだね？」

「……好きにしてください、もう……！」

そうして、一日が終わる。これがここ数週間の僕の毎日。

そしてとうとう、門前払いを食らう日がやってきてしまった。いつかこうなるとは思っていたけどね。

「マイナンさん。材料を持ってきてくれない限り、中には入れさせませんよ」

「……マジで？」

「マジです。さあ、黄色いグミを持ってきてください」

ん？

「持つてくるだけでいいの？」

「はい。私がジュースにして差し上げますから」

No おおお——！！

「そ、それはいくらなんでも……」

「ひどい——ですか？」

あなたのほうがひどいではありませんか。

ジュースを作らせてくれるわけでもないのに毎日毎日居座って。

それを黄色いグミ1個でチャラにしてあげようと言っているのですよ？」

うつ……。

これには、さすがに返す言葉が見つからない……。

「さあ。観念して黄色いグミを持ってきてください」

「うつ……。わかったよ」

しぶしぶと住処へと戻り、黄色いグミを持ってカフェへと戻った。

「マイナンさん。渡してください」

カウンターの奥からパッチーが手を差し出す。

「嫌だ！」

「渡してくれないと、作れないではないですか」

「作らなくたっていい。これは僕が初めて見つけた黄色いグミなんだ！」

「だからこそ、おいしいジュースにして差し上げると言っているのです！」

ほら、他のお客様も並んでいるのですから、ダダをこねるのもいい加減にしてください!!」

くう！ さよなら、黄色いグミ。またどこかで会おうな。

「はい、出来ましたよマイナンさん。……って、泣かないで下さいよ」

パッチールに無理やりジュースカップを持たされると、しびしび近くの席に座り、そして飲んだ。

「おお、美味い！！ パッチール、最高！！」

「そう思っただけでしたら、長時間居座らないでください。そして、ここに来る時には材料必須をお願いします」

……そんなあ。

「あの」

「……ん？」

「あのあのあの！」

「え、えつと……何かな？」

僕の前で手をバタバタさせながら必死で何かを伝えようとするポケモン、プラスル。

「あのあのあのあの！」

「なんで泣いているの？」

「なんで1人でいるの？」

「ボクを仲間にしてない！？」

質問多いなあ……。……『仲間にして』？ って言った？

「えと、もう一回言ってくれる?」

やっとのことで言い切ったらしく、そのプラスルは顔を赤くしてゼエゼエと呼吸をしていた。

「あ、あの……」

「いや、あのね。もう一度聴きたい言葉があるんだ。だからそれを聞きたいだけなんだ。質問にもちゃんと答えるから、さ」

不思議そうな、そして泣きそうな顔をして僕を見てくるからこっちが焦ってしまう。

「えつと……どうして泣いているの?」

「うん。このジュース、もとは黄色いグミだけど、僕が初めて見つけた黄色いグミだから少し、いやものすごく飲むのがもったいなくって――。」

だから泣いていたんだ」

へえ、と彼? は相槌を打つ。

「そ、それじゃあ、どうして1人でいるの?」

「仲間がいないからだよ」

「そ、それじゃあ、ボクを仲間に――」

「もちろん! よろしくね、プラスル」

それからというものの、僕はプラスルと一緒にいろんな所へ探検をしに行った。

もちろん、負けてしまうこともあったけど、1人で探検している時よりもずっとずっと楽しくなった。

そしてそれは、そばにプラスルがいるおかげだと分かった。

でも、僕はプラスルにまだ聞いていないことがあった。それは――

「プラスルってさ」

「うん」

「男の子？」

「女の子です!!」

どこをどうやったら間違えるの、マイナン!!」

だって、“ボク”って言われたらどっちだかわからないじゃないか。

「ちょっと、なんで黙ってるの？ 何か言つてよ、マイナン!!」

「少し考え事していただけだよ、プラスル」

「人が怒っているっていうのに！」

もう！ だからパッチールさんに追い出されかけるんだよ？」

「いや、それ全然関係ないし!!」

軽く突っ込みをいれながらも、僕らの探検は続いていく。

そう。僕とプラスルという名コンビがいる限り、ね。

1st マイナン（後書き）

洗濯物を干していたらふと浮かんできたのです。

本当はマイナンが自棄酒ならぬ自棄ジューズをしているときにプラスルを出す予定だったのですが、話の流れ的にこうなってしまいました。

どうでしょう？

2nd 主人公とパートナーとの出会い ～その1～（前書き）

主人公が名前しか覚えていなかった場合……

2nd 主人公とパートナーとの出会い ―その1―

ここはとある浜辺。

辺りではクラブたちがたくさん泡を吐いている。そしてその泡は、夕暮れ時の仄かに暖かい太陽の光に照らされ、綺麗に光り輝きながら、空にプカプカと浮かんでいた。

そこへうなだれながらやって来たのは、長くとがった耳を持ち、茶色い体で首元がふわっふわの白い毛で覆われた一匹のポケモン――イーブイである。

「はぁ……。今日こそはギルドに弟子入りしようと思ったのに……。イルって意気地無しだなぁ」

どうやら、名前は“イル”と言らしい。

イルは頭を持ち上げ、空を仰ぎ見た。視界に広がったのはクラブたちが吐くたくさんの泡がきらきらと光り輝いている光景である。

「イル、落ち込んだ時は決まってここに来るんだけど、今日も来てよかったな。

なんだか元氣になれそう。明日も頑張ろうって思えるよ」

イルは水平線に沈んでいく太陽を眩しげに見つめながら、心の中に明日の自分をゆっくりと思い描く。

そう。それはギルドに弟子入りし、探検隊として過ごす日々を始めている自分を……。

ふと自分の左手を見たイル。すると、そこにはオレンジ色の丸っこい何かが……。

「……ん？」

好奇心旺盛のイルはゆっくりとソレに近づく……。

「え……、ロコン？」

珍しい——ロコンがいるなんて……じゃなくて！」

ハッとしたイルは、急いでそのオレンジ色の物体もといロコンに駆け寄る。

「ちよつと、キミ！！ 大丈夫？」

ねえったら！ ねえ！！」

「う……ん」

「気がついた？ こんなところで寝てたら風邪ひくよ？
しかも、今冬だよ？ 大丈夫？」

イルは勢いに乗せたまま言葉を連射する。が、目が覚めたばかりのロコンは“気がついた？”と“大丈夫？”の2つの声しか耳に届かなかった。

「……うん、大丈夫。というか、あなた、誰？」

「イルはイーブイのイル！ あなたは……ロコンだね？」

イルはちょこんと相手の前に座ると少し意味が通りにくい自己紹介をする。

「え……、ロコン……？ あたしが？」

「え、違うの？」

そのオレンジ色の毛並みに6つに分かれた尻尾。

それに、頭の上の……よくわからない茶色い飾り。

——これってロコンの特徴じゃないの？」

ロコンは目の前にいる相手をジーと見つめる。

「イーブイ？」

「……イル、よく知り合いに“寝ぼけてるのか”って言われるんだけど、——あなたも寝ぼけてるの？」

イルは目の前の相手を不審そうに見る。そしてため息をついた。

「いいい、ロコン？ もう一度言うよ。

イルはイーブイのイル。あなたは？」

「……ポケモンがしゃべったあ！？」

ロコンは大声を出した。その声に驚き、ひっくり返ってしまったイルを中心に、ぐるぐるとかけ回り始める。……が、数回円を描いただけですぐに転んでしまった。

「……イタタタ」

「もう！ なんなのよ、いきなり!!」

イルは転んで砂だらけになってしまったロコンのそばへと近寄る。

「だって、あたしは……あたしはロコンじゃないもの。
あたしは……、なんだっけ？」

イルはズシヤリと砂の上に転んだ。

「ち、ちよつと待つてよ。何それ!？
自分が何者かもわからないの!？」

イルはこけた体勢のままロコンに話しかける。ロコンはというとうーん……と唸っている最中で、転んだイルには見向きもしない。

「でも、あたしはロコンじゃないんだよ。何だったのかは分からないけど……」

「……怪しい。じゃあ、名前も覚えていないんだよね？」
「ううん。名前はココロ。可愛いでしょ？」

イルは「自分で言うか？」という冷やかな視線を“ココロ”と名乗るロコンに向けるが、気づかれず……。そして、何度目かの質問をイルにした。

「あなたは……、イーブイ？」

よほどの天然なのか、それともよほどのおバカなのか、同じことを再三聞くロコンのココロ。

さすがのイルもそれには呆れてしまう。

「イルです!! 3回目だよ!？
ちゃんと覚えてよ!」

「ごめん、ごめん。イ……ウ？」

「……わざと？ わざとだよね、ココロ。
イル、いい加減にしないと怒るよ?」

イルは眉間をぴくつかせながら真偽をココロに問う。

「ご、ごめんねイル……さん」

最後の最後でようやく目の前にいるイーブイの名前がわかり、ドキドキしながら謝る。

「イルでいいよ！」

ねえ、ココロ。どうしてこんなところで寝ていたの？」

イルは先ほどの怒り顔とは打って変わって、にっこりと笑う。そして真剣な表情になった。

「え……どうしてだろ。全然覚えてないや」

「きおくそーしつ”ってやつかな？ ……きや！？」

イルの後ろから誰かが勢いよくぶつかってきた。そして、イルが首からかけていた小さなクリーム色のポシェットから何かが転がり落ちる。

「いったあ……。何なのよ、もう！」

イルが顔をあげると、そこにはドガースらしき丸いやつとズバットらしきコウモリが並んで浮いていた。

「何、ってお前にちょっかい出してるのさ」

「ついでに、これはもらっていくぜえ」

「ああ！」

ズバットとドガースが持っているもの。それは、先ほどイルが落とした小さな石のようなものだった。

「か、返してよ！」

「やだね！ 返してほしけりや、自分で取りに来な。じゃあな」
「あばよ、弱虫くん」

そういうと、ドガースとズバットは沖にある小さな洞窟の中へと入っていきこうとした。――が、目の前で火の手が上がる。
先ほどまでイルの隣にいたはずのココロが泥棒の真ん前で立ち塞がっていた。

「返しなよ！ イル、やるよ！！」

「え……。あ、うん」

ココロはおつとりさんだと思っていたイルだったが、それは間違いであったと気付く。

そして、ものの数分でズバットとドガースをほぼ一人の力で蹴散らし、自分の宝物を取り返してくれた。そんなココロに、イルは取り返してくれた喜びと自分の不甲斐無さを感じ、大泣きしてしまった。

ココロはというと、そんなイルを妹のように扱い、上手になだめるのであった。

「はい、イル」

イルがようやく落ち着いたころ、ココロはイルに取り返したものを手渡す。

「ありがとう、ココロ。イル、これがなかったら……」

イルはそれをギュッと抱く。とても大切なもののように……。

「それは何なの？」

「これは……、イルの大切なもの。」

イル、小さい時から探険が大好きで、秘密の財宝とか誰も言ったことがない秘境とかのお話を聞くと、すぐくワクワクするの。

そんな時に見つけたのがこれなの。

ココロ、ここをよく見て？」

イルは大切に抱いていたそれを浜辺の上に置く。そこにはココロが今までに見たことのないような、不思議な不思議な模様が描かれていた。

「不思議でしょ？」

イルはココロの感じたことを代弁するかのように言う。

「イル、この模様の秘密を解くのが夢なの。」

もし解けたら、イル、うれしくてどうかなっちゃいそうだよ」

イルは一人でアハハと笑った。ココロはそれをなぜかうれしそうに眺めていた。

ひとしきり笑った後、イルは再び真剣な顔つきになった。

「ねえ、ココロ。イルと探検隊やらない？」

「タンケン……タイ？」

ココロはきょとんと首をかしげた。

「それは……、何をするの？」

「なってみればわかるよ！ それに見たところココロ行く当てがなさそうだし」

自信満々に言い切るイル。

「探検隊のお仕事をやっているうちに、記憶も戻るかもしれないよ。ねえ、ココロ。イルと探検隊にならない？」

ココロはしばらく考えてみたが、イルの言うとおりに感じ、イルと一緒に探検隊を目指すことに決める。

そして数時間後、イルとココロはプクリンのギルドの新弟子として迎えられていた。もちろん、時刻は夜中である。

イルとココロが新弟子になってから1カ月後。各地で時の歯車が盗まれるという事件が起こった。

時の歯車は、その場所の時を司っているもので盗まれるとその場所の時が止まってしまい、大事件となる。だから、どんな悪党も時

の歯車にだけは触らないようにしてきていたのだが……。

「盗賊、ジュプトル!？」

「そう。それが今回の事件の犯人みたいだよ、イル」

ココロは掲示板から無理やり剥がしてきた張り紙を、ヒラヒラさせながらイルに伝える。

「ココロ! ジュプトルをイル達の手で捕まえよう!！」

「当たり前じゃない。あたしのあの意味不明な能力も使えるだろうし」

二人は弟子部屋でパシン、とこぎみよい音を立ててハイタッチする。それは『必ず、手柄は自分たちのものにする』という意思表示でもあった。

それから数日後。二人はヨノワールという物知りな独り者の探検家に出会い、イルの能力のことを説明する時があった。

ヨノワールはココロの名前を聞いたとき、不思議そうな顔をしたが、すぐに元の表情に戻った。そして、「人間」というものを知っているかどうか尋ねてきたが、「知らない」と答えると残念そうにしたが、その質問の意味が明かされることは決して、ない。

それから2週間後。

ヨノワールの助けもあり、盗賊ジュプトルは捕まった。そして時空ホールを介して、未来から来たというヨノワールとジュプトルはもとの世界へと戻って行った。

「ねえ、ココロ。ジュプトル、なにか言いたげだったよね？」
「……うん」

ココロはイルの質問に答えながらも、急な胸騒ぎに不安を覚えた。

「ジュプトルは捕まっちゃいけなかったんじゃない？……？」

「ココロ！？ 何言っているの！！」

ジュプトルは悪いやつなんだよ！」

「……そう、だよ。うん。」

あたしったら、何言って……」

アハハと笑うココロだったが、胸騒ぎが治まることは決してなかった。それどころか、ジュプトルにもう一度会って話を聞きたい、という思いが募るばかりであった。

しかしその願いは果たされず、イルの宝物の秘密を解くという願いも果たされることもないまま、世界は破滅へと急速に向かって行くのであった。

未来世界では。

「ディアルガまで……。もうダメだ！！」

ジュプトルは、ピンクのセレビィとともに時の回廊のすぐそばまでやってきていた。しかし、あと一步のところでヨノワール軍団に

追い込まれ、絶体絶命の状況に追い込まれていた。

「しかし、ココロが……」。

オレとともに過去の世界へと行ったココロが、時の破壊を止めてくれるだろう……。

ココロ！ 後は頼んだぞ！！」

そんなジュプトルの必死の望みを聞いたヨノワールは、ある一つのことを思いだす。

「そういえば……ココロと名乗るロコンがいたな。時空の叫びも使えていたようだが……」

「な、何だと！？ こ、こうしてはおれん。

セレビィ、過去の世界へ行くぞ！」

「はい！ ジュプトルさん」

*

2nd 主人公とパートナーとの出会い ～その1～（後書き）

ジユプトルの願いは叶うのか、それとも叶わないのか……。いくつか前の文を読めばわかるかと思います。

今回は『名前しか覚えていない』という状態にして話を考えてみたのですが、どうでしたか？

自分では何とも批評ができないので、してくださるとうれしいです。

3rd Christmas

ここは、ポケモンたちが仲良く暮らす小さな村。

近くには“トレジャータウン”と言う町や、“ギルド”と呼ばれる探検家の見習いができる大きな建物がある。

今、その建物の入り口から小さな影が、2つ並んで出てきた。どうやら、ギルドの弟子のようだ。

「ココロお。今日も寒いね〜」

「冬真つただ中だしね。」

イル、早く買い物を済ませてギルドの部屋に戻ろう」

言うが早いか、“ココロ”と呼ばれたオレンジ色のポケモン――

ロコンはトレジャータウンのほうへ一人、走っていった。

そのあとを「待ってよ〜！」と呼びかけながら、茶色の体をしたポケモン・イーブイ、“イル”が追いかける。

トレジャータウンに着き、今度は仲良く並んで歩く2匹。

「ねえ、ココロ。今日は何を買うの？」

「え？ えーとね、オレンにモモン、それから――」

ふと、前を向くと緑色の葉をつけた大きな大きな木が、色とりどりの飾りを付けてそびえ立っていた。

木のとっぺんには黄色の大きな星が飾りつけられている。

（2、3日前に来た時はこんな木、なかったはずだけど……。

でも、あの木はまるで——」

「——ココロ。ココロってば！
それからなあに？ 何を買うの？」

イルが呼びかけてくる声でフツと現実を引き戻されたココロ。
その言葉の意味を理解するのに少し時間を要するほど、あの大きな木に見とれていたのだった。

「もう！ どうしちゃったの、ココロ？
いつものココロじゃないみたい」

「ごめん、ごめん。あの、大きな木に見とれてて……」

「木？」と聞き返すと、イルは先ほどまでココロが眺めていたものをその瞳に映す。

そして、そんなに珍しいものではないとも言つような、けれども少し懐かしさを秘めたような表情で口を開く。

「ただのクリスマスツリーじゃない。

昼日中に見とれるなんて……。夜に來ると灯りがついてもっと綺麗だよ」

「——やっぱり、クリスマスツリーなんだ」

ココロはそうつぶやくと、自分の背丈の何十倍もある大きな木を見上げる。

「そうだよ。ニンゲンの世界にもあったの？」
「うん——」

——ニンゲン。この近辺では見かけない珍しい生命体。

後ろの二本足で立ち、二本の「手」と呼ばれる前足でたくさんのもを作り、器用に社会を発展させていった、と文献には伝えられている――。

しかし、その姿を見たものは誰もいないとも言われている。

ところが、ココロは今はロコンの姿をしているものの、ニンゲンであつた。

だが、とあるアクシデントからニンゲンからポケモンへと姿を変えた。その際、ニンゲンであつた時の記憶――名前と自分がニンゲンだということと常識以外のすべて――を失い、浜辺に倒れていたところを偶然通りがかったイルに助けられたのである。

「そっかあ。」

――「ココロ、本当はもつといろいろ話を聞きたいんだけど、」

「うん?」

「寒いから早く買って帰ろう?」

見るとイルはぶるぶると震えていて、縮こまりたいのを我慢しているように見えた。

「あ、うん。ごめんね、イル。」

寒いのに立ち止まったりして……」

「ううん。早く買って帰ろう。ね?」

そっちのほうに謝られるより嬉しい、と言いたげな瞳でココロを見つめていた。

「ふう。やっぱりギルドの中は暖かいね、ココロ」

二匹はギルド内に設けられた自室へと戻っていた。
そして部屋に入った時、イルはフルフルと体を降り、体から水気を飛ばした。

「まさか、雪が降ってくるなんて思わなかったよ」

「そうだね。でも白くて綺麗だった——」

買い物をして店から出てくると、雪が空からちらほらと降りだしていたのだ。

それほど、外の気温は低くなっているのだ。

体が十分に温まったころ、ココロはイルに話しかけた。

「……ねえ、イル。」

ポケモンの世界にも“クリスマス”っていうのがあって、プレゼントを渡したりするの？」

「そつだよ。ニンゲンの世界もそうなんだねー！」

イルは何に感心したのか、驚きの眼差しをココロに向ける。

「ココロ。プレゼント交換しよう！」

ちょうど夕食を食べ終えた後で、イルより数分早く部屋に戻り、ふうと一息をいれたときだった。

ココロは抜群のタイミングで口にくわえていたお菓子なるものを、

誤って飲み込んでしまう。

「はぁ!?!」

ひとしきりむせ込んだ後、迷惑そうな声をあげる。
いきなりこの子は何を言い出すのか……。

「明後日なんだ、クリスマス。それまでにお互いプレゼントを買って隠しておこう」

隠す場所がこの狭く殺風景な部屋の中のどこにあるというのか。
ぐるりと草でできたフトンしか敷かれていない、円形の狭い部屋
の中を見渡した後、イルが言った言葉を再度思い返す。

……えっと、明日——がクリスマス？ ということは——。

「もしかして、明日がクリスマス・イヴ!?!」

「あつたり〜!」

明日の夜、ギルドでパーティするんだって。
さつきチリーンに教えてもらったんだ」

どおりで戻ってくるのが遅かったわけだ。一人納得し、うんうん
とうなずく。

「じゃ、ココロ。プレゼントよろしく!

あたし先に寝るね。おやすみ」

「え——。ちょ、ちよつとイル!?!」

慌ててパートナーの名を呼ぶが、時すでに遅し。隣から穏やかな

寝息が聞こえるばかりであった。

「プレゼント、かあ」

殺風景な部屋にただ一つある窓から、星や月の光が降り注ぐ。

その窓から外を眺めながら、いつの間にかに交わされてしまった約束を思い出す。

「イルは、何をあげたら喜ぶんだろう？」

数ヶ月前に相棒^{パートナー}となったポケモンの寝顔を見ながら、今日一日のことを思い出す。

（喜ぶかどうかは分からないけど、アレにしようか——）

ココロはイルにプレゼントするものを決めたようだ。

そして、カバンを開け、所持金の確認をするとそのまま眠りに就いてしまった。

「どうしよう、ココロ。」

あたし食べすぎちゃった……。太ったらどうしよう……」

女の子ならではの悲痛な言葉をココロに向かってこぼす。

「だから『それぐらいでストップしなよ』って何度も言ったじゃない

い。

それでも『大丈夫、大丈夫』と言って食べ続けたのは誰？」

厳しい言葉をボンと口に出すココロ。

イルは「ごめんなさい」と言ってうなだれる。

しかし――。

「でも、パーティなんだし！　少しぐらい食べ過ぎても大丈夫だよね！？」

この子に反省の色はあるのか。それは永遠の疑問と化した。

「イル、昨日の約束忘れてない？」

「うん。ちゃんと覚えてるよ。明日の朝礼の後、ギルドの外で交換しよう」

なぜギルドの外？　と思いつつも「いいよ」と答える。

そして、約束の“明日”がやってきた。

「せう、で交換ね」

「う、うん」

確かに“ギルドの外”とは言っていたけど――、ここパツチール

のカフェじゃない!!
それをイルに問うと、だって外寒いんだもん、と一蹴されて終わった。

「聞してる、ココロ？」

行くよ、せいの！」

「あ、せいの！」

イルと少し遅れて同じ言葉を口にする。

そして、イルが持っていた包みが自分の前に置かれた。

「ココロ、開けてもいい？」

言うが早い、すでにバリバリと包み紙を破る音が響いていた。
聞く意味ないじゃん、と思いつつも、そこは「いいよ」と答えておいた。やがて、包み紙から桃色で長くふわふわした物が現れた。

「うわ……。ココロ、こ、これって、——何？」

座っていたイスからココロが転げ落ちる。

「え。だ、大丈夫、ココロ？」

「ま、マフラーだよ。首に巻いて使うの。あったかいよ」

へえ、と言いながらさきこちなくそれを首に巻きつける。が、巻いても巻いてもすぐにポロリと落ちてしまう——。

見ていられない、とでも思ったのか。いつの間にかココロがイル

の後ろに回り、マフラーを巻いてあげていた。
妹の世話を焼くお姉さんのように見える。

「ふわぁ、あったかいね。ありがとう、ココロ」

につこりと可愛く微笑むその顔は、今までに見たことがないくらい幸せそうだった。

「あ、ココロ。それ、開けていいよ」

そっぴえば、まだイルからのプレゼント見てないな……。

ココロはゆつくりと包み紙を開いた。

そこから現れたのは――。

「えーと……、これこそ、何？」

――A4ほどの大きさの、ただの白い紙だった。

「あ、炙り出し！ ほら、よくあるでしょ？」

オレンのみ
柑橘類の汁を墨の代わりにして文字を書くやつ！ それだよー！」

何それ……と思いつつも、自ら放つ火の粉でそれを炙ってみる。

「ど、どうかな？」

「うーん……。あ、出たよ」

「よかったあ。あ、あたし外に出てるから、読んだら来てね」

一人残されたココロは何がなんだか分からないまま。
とりあえず今、手に持っている紙にうきあがった文字を読むこと
に専念した。

『ココロへ

いつも いっしょに いてくれて
ありがとう

あたし ともだちが いなかったから
まいにち とても さみしかった

くりすますも いつも ひとりだった

だけど ことは ココロと
いっしょに すごせて とても たのしかったよ

これからも いっしょに
いろんなところを たんけん しようね

らいねんも いっしょに すごせますように

イル

平仮名ばかり。

でも、たしかポケモンの世界には平仮名なんてものなかったはず

……。文字を書くには足形文字っていうものを使っみたいだし……。
すごいね、イル。いつの間に勉強したの？

ココロは外へと飛び出した。

そして、近くの岩の上で座っていたイルに抱きついた。
たった一人の親友へ、最愛のパートナーへ、この言葉を伝えるために。

「イル、これからもずっといっしょだよ！」

雪がちらほらと舞い降りてくるホワイトクリスマスの朝の出来事
だった。

3rd Christmas (後書き)

クリスマス、過ぎちゃってますが、うん。気にしない。

4th St・Valentine day

「ねえ、ココロ。『バレンタインデー』ってなあに？」

パートナー・イルのその言葉を聞いたとき、私は絶句した。
なに、ポケモンの世界にはバレンタインデーが無いと、そう言い
たいの？ イル！

「ねー、ココロってば。何なの、『バレンタインデー』って？」

うーん……。

でも、イルはけっこう無関心というか無頓着というか無知な子だ
から、イルが知らないだけなのかも……？

よし、こうなったら！！

「コーコーロオ……」

「イル、トレジャータウンに行くよー！」

「え、もうすぐ夕御飯のじか——」

私は近くでなぜかしよげ返っていたイルの手……はつかめなかつ
たから、尻尾をくわえて引きずっていく。

あーもう！ 四つ足の生き物ってなんでこんなにも不便なの！？

……かくいう私も、今は四つ足の生き物なんだけど。

あ、紹介が遅れました。

私の名前はココロ。ロコンのココロ。とは言っても何か月前まで
はニンゲンだったんだけどね。

どういう理由からか知らないけれど、ニンゲンからポケモンになつてポケモンたちが暮らすこの島に辿り着いた。とは言つても記憶がないから自分から来たのか、そうでないのかさえもわからないのだけだ。

海辺で記憶をなくして倒れていた私を助けてくれたのが、今私が引^{くわえて}張っているイーブイのイル。

イルは臆病で、私がいないと全然ダメな子なんだけど、いざという時にはとっても頼りにな……ってくれるだろうと思っっている女の子。

私を助けてくれた時も、大切な宝物を悪党に奪われても追いかけるようとしなくて……。私が無理やり引張つていつてようやく取り返すことができたぐらい。

しかも、この子。こんなに臆病なのに『探検隊になりたい』と言つていたの。でも、探検隊になるためにはギルドに弟子入りして修業しないといけないらしくって。何度もギルドに行っているらしいのだけど、そこまで。そこから向こうには進んだことが無くて、私と出会つた海辺に来たのもギルドに行つた帰りだと言つし。

まあ、とにかく記憶を失つた私は行くところが無いし、一応助けてもらつたし（助けてもあげたけど）、と言うわけで恩返しとしてイルと一緒にギルドに弟子入り。

今は修行中の身なわけなのです。

で、トレジャータウンに住む人全員と、ギルドにいる兄弟弟子や親方、探検隊の皆に話を聞いて回つた結果……うん。本当の本当にポケモンの世界にはバレンタインダーは存在しないみたいですね。

「だから言つたでしょ、『バレンタインダーって何?』って。ココ

口、イルが言ったこと、ちゃんと聞いてた？」

「聞・い・て・ま・し・た。」

でもあんたの言っていることはあんまり頼りにならないの！！」

なんてこと言ったら絶対泣く！ 大泣きする！！

臆病なうえに泣き虫だなんて、うっとおしい事この上ない！！
とりあえず、バレンタインの説明だけしておこうかな……。

流行るかもしれないし！！ いや、絶対流行らせてやる！！

「イル。バレンタインデーっていうのはね、2月14日に好きな男の子に手作りのチョコレートを贈る日なの。

好きじゃない男の子とか友達の子にチョコレートを贈るのは『義理チョコ』って言うんだ

最近女の子同士とか友達同士でチョコレートを贈りあう『友チョコ』ってのも流行っているんだけど。

イルも私とチョコレートの贈りあいっこしない？

別にチョコレートじゃなくてもチョコレートを使ったお菓子とか、普通のお菓子でもいいんだ。

ねえ、イル。一緒にしようよ！！」

目をキラキラさせてイルのほづをくりと向く私。

きつと「うん、ココロ！ やろー、やろー」って言うてくるんだろうな。

「……………」

寝・る・な・よ……！

「ちょ、ちょっとイル、起きてよ!~!」

「うーん……。もう少しだけ……」

起きるのにもう少しも何もないし!!

「お、起きてつてば、イル!」

何度もゆすったけど、その夜は全然起きなかった。

そして、バレンタインデーの日まで何度もその話をしていたのだけど……話し終える頃にはぐっすりと眠りについていて、最後まで聞いてくれる時はなかった。

おかげで、私のバレンタイン大作戦は不発に終わったのである。

4th St・Valentine day(後書き)

はてさて。

ココロは一体誰にチョコを贈るつもりだったのか。
バレンタインの説明はあんなものでよかったのか。

さて、次はホワイトデーだ(嘘

ちなみに外国では、男の子が女の子にプレゼントをするらしいです。

5th ジュプトルとの別れ（NG版）（前書き）

さて、映画を作ることになったとある探検隊。
うまくできるのでしょうか？

5th ジュプトルとの別れ（NG版）

セリフは完璧。

うごきも完璧。

いよいよ映画撮影本番です。

t a k e . 1

「おれは、こいつとともに未来へ帰る！」

「ええ!？」

ジュプトルの突然の申し出に驚き、とびあがる2匹……。

「ミホシ、ツキミヤ。

別れは辛い、後は頼んだぞ！」

「そんな。

ボクにジュプトルの真似なんて出来ないよ……」

首を左右に振り、否定するツキミヤ。

ジュプトルはそれを力強く励ます。

「お前ならできる。そしてやるんだ——」

「……おい、ジュプトル」

KYなヨノワールが口を挟んだ。

「（場面が違うだろ）」

もう少しだから静かにしてろ」

「……………仕方ないな」

舌打ちすると、先ほどまでと同じように黙りこむヨノワール。
しかし頻繁にちらちらと斜め上を見上げており、どうも様子がおかしい。

アチャモのミホシ、キモリのツキミヤとの会話を終えたジュプトル。
ヨノワールと共に時空ホールへと向かう――。

「じゃあな――つてえええ!?!」

「どうしたの、ジュプトル……………あ」

「ジュプトル……………ル、大丈夫?」

「だから言っただろう――」

「ハリボテが倒れてくるぞ、と」

呆気なく下敷きなジュプトル。

数分後、自力で抜け出したそうな。

「受け取ってくれ!!」

その言葉とともにジュプトルが足元に投げたのは5つの“時の歯車”。

ジュプトルたちの住む未来世界を、暗黒の未来世界にさせないために重要なものである。

「ど、どういうこと!?!」

「おれは、こいつとともに未来へ帰る!!」

驚きとびあがるミホシとツキミヤ。

「別れは辛い、後は頼んだ……ぞ。

——おいヨノワール。そこで何してる!?!」

いつの間にか“みがわり”を使い、ジュプトルの手から抜け出していたヨノワール。

なにやら腕を回して怪しげな動きをしている。

「おまえが肩ばかり押すから肩が外れたんだ」

「はあ!?!」

「そういうことから、私の出番がないところから再開してくれ」

「な、なんだと!?!」

おまえがいないと先が進まないじゃないか!?!」

ヨノワールの非協力的な発言に怒りを覚えるジユプトル。

「なんならその“みがわり”を私だと思って——」

「できるか、んなこと!!」

おれにはおまえが必要なんだ!!」

鼻息荒く、ヨノワールがいないと続けないと言い張る熱い心を持ったジユプトル。

その熱い心は恋心なのかもしれない。

そんなジユプトルにミホシは——。

「あのさ〜。

シリアスな場面でギャグにまわらないでくれる？
まだカメラまわってるんだよ？」

「「え」？」

見ればカメラマンのピカチュウがカメラを持ってこちらをつつしているではないか。

「な、何を……」

「ん？」

ああ、こっちのほうが面白いかなあ、って!」

「「いますぐ止める——!!」」

2匹の叫び声が辺りに木霊したのであった。

ジュプトルもヨノワールも♂です。

take . 3

ジュプトルとヨノワールが時空ホールを通り、未来世界に帰ってしまつた。

そのあとに残されたのは、時空ホールがあつた場所を見つめながらただ茫然とたたずむアチャモとキモリの2匹の姿。

「行かなくちゃ」

こらえきれない涙を流しつつ、キモリのツキミヤが向かうのはジュプトルが落としていった5つの“時の歯車”のもと。
一つ一つ丁寧に拾い集め、きんちゃく袋の中へと入れる。

そして――。

「ミホシがジュプトルに――、あれ？」

ジュプトルがジュプトルが――あ、あれね？」

「“ジュプトルがミホシに”、でしょ？
すみませーん、カットお願いしまーす」

淡々と冷たく言い放つミホシ。

ミホシはいつセリフを言うことができるのだろうか。

TO BE CONTINUE

5th ジュプトルとの別れ（NG版）（後書き）

続きません、たぶん

6 t h ギルドの朝（N G 編）（前書き）

キャスト

新弟子 1：ミホシ（アチャモ）

新弟子 2：ツキミヤ（キモリ）

ギルドの弟子たち：ペラップ ビツパ e t c ・（おい！！

特別出演

親方：プクリン

その様子を見て唾然とする兄弟子・ドゴーム^{あに}。

「と、とりあえず起こすか」

頬をポリポリとかきながら大声をあげる準備をする。

「起きろー！！」

朝だ……ゲフ！？」

ドゴームのあごに新入り2匹のパンチとキックがクリーンヒット！

ドゴーム、ノックダウン！

カンカンカン！！

試合終了！！！！

新入り2匹はその後ペラップにこっぴどく叱られたとか。

そしてドゴームは新弟子の部屋に近づくのを控えるようにもしたのだとか。

「では、朝礼を始めるぞ」

ギルドの弟子達を前に高らかと宣言するのは、プクリン親方の一番弟子、ペラップ。

「では、親方様。朝の言葉をお願いします」

ペラップはそう言うと、自分の隣にいる親方・プクリンを見る。

威勢のいい言葉が飛び出すのを待ち構える新弟子2匹。

だが、プクリンの口から出てきたのは――。

「グー。グーグー。」

グーグーグーグーグー……」

なんと、いびきであった。

「え、何。何なの？」

何かのどつきり？」

と、パートナー・キモリのツキミヤに囁くアチャモのミホシ。

だが、ギルドの弟子たちは口々に囁く。

（親方様、また目を開けたまま寝てるぜ……）

（ヘイヘイ。凄いよな）

（でも、そういうお茶目な親方様もス・テ・キ。キャッ♪）

どうやら、毎朝毎朝このような感じらしい。

「親方様、ありがたいお言葉、ありがとうございました♪」

そんなこんなで朝礼も終盤。

ペラップの一言で皆一斉にある言葉を唱えた。

「ひとつ。」

仕事は絶対サボらない」

「ふたっつ。」

脱走したらお仕置きだ」

「みつっつ。」

みんな笑顔で楽しいギルド」

「これにて朝礼終了♪」

みんな、仕事にかかるよ♪」

「おーー！！」

弟子達は全員、各自の仕事へと向かい、地下2階はペラップと寝ている親方様——と壺の前で何をしているか分からないグレッグルだ

けになった。

「ふう」

ペラップが一息ついたとき、

「ねえ、ペラップ」

呼び声が聞こえた。

見ればいつ目を覚ましたのか分からないプクリンの声だった。

「ボクの腹話術、どうだった？」

え？

7th 出会い——収録中（前書き）

監督

ピカチュウ

撮影協力

プクリンのギルド

ドクローズ

7th 出会い——収録中

「シーン1 take1!」

ボクはツキミヤ。種族はキモリ。

ボクは今日もとある丘の上にあるポケモン探検隊のギ、ギ、ギ、ギ、ギルドへ……弟子入りしに——。

「ポケモン、発見! ポケモン、発見!!」

「誰の足形? 誰の足形?」

「足形は——」

足元にある網の下から声が2種類聞こえてきた。

「う、うわああああー!!」

ボクは怖くなって逃げ出してしまった。

「……足形は、逃げた。足形は、逃げた」

ちよつ、そこまで実況しなくなっちゃっていいんじゃない……。

ボクは岩陰からその声を聞いてしまい、落ち込む。そしてトボトボと元来た道を歩いて戻ることにした。

ここは、ボクのお気に入りの場所。なんでもない普通の浜辺なん

だけど、夕方になればクラブというポケモンたちが泡をはくんだ。その泡が夕焼けの太陽に反射されて、キラキラ光る。その光景がものすごくきれいなんだ……。

だから、ボクは落ち込んだ時に決まってここにやってくる。気持ちが晴れる気がするから。

そんなボクの目の前に何やら黒っぽい影が……。ちょうど浜辺の中央付近に何か——いや、誰かが倒れている!!
あたりを見回してもボクしかない。——いや、そりゃクラブたちはいるけど、彼らは気づいてないし……。

「ちょ、ちよっとキミ大丈夫!？」

ボクは仕方なく、慌ててその得体のしれない生き物に近づいた。

「ちよっと、起きて! 起きてよ、キミ!」

一生懸命その得体のしれない物体を揺り動かすボク。すると、突然「グウ……」という気持ちよさそうな音が聞こえてき……え? グウ? グウって……。

『はい、カット——!!』

……寝てんじゃね——!!!!

ボクは怒りにまかせ、その寝ている物体へ電光石火をぶつけた。その物体は海へと沈んでいく。

その後なんて、知ったこっちゃない。

たとえば、ボクがそいつの放った火の粉で真っ黒焦げにされたとしても……。

『シーン2 take1!』

「き、キモリがしゃべった——!?!」

目の前にいるヒヨコ……いや、ヒヨコっぽいポケモン・アチャモは当たり前前に驚いている。ムカツと来たボクは、それに負けじと言い返した。

「そこのアチャモ、お前だってしゃべってるだろ——!」

「え……?」

目の前のアチャモは思考が止まったらしく、立ち往生する。そして視線を下げると、突然ワタワタと周辺を走りまわりだした。

「何やってんの?」

「え、え!?! な、何この体!?!」

「何って……アチャモだろ?」

こいつ、頭大丈夫か? と思いつつ、言葉を返す。すると、アチャモの動きはピタリと止まった。

「あ、ちや、も?」

「アチャモじゃなきゃ、ワカシャモか? でもそんなにちびっこいワカシャモ、ボク知らな——」

「ええ——!?!」

言い終えないうちにそいつは絶叫した。ボクの耳がマヒするほど、大きな声で。

「あたしは人間だよ!? アチャモなわけない!!」

やっぱり頭逝ってんのかな、こいつ。

……というか、人間——ってなんだっけ? ハッ、まさか!

「お前、怪しすぎる。お尋ねものだな?」

「なんでそうなるのよ! そういうあんたこそなんなのよ!!」

これが、ボクとミホシの最初の出会いだった——。

『はい、カーツト! もう少し激しくってもいいかもねえ』

これ以上どう激しく?

何、技使ってもいいっていうのか?

その後も同じシーンを何度か撮らされたんだけど、『まあ、最初のでいつか』というピカチュウのカメラマン兼監督の言葉にボクは——いや、ボクらはタネマシンガンと火炎放射をお見舞いしてやった。

『し、シーン4 take3!』

「……ほ、ほあ? ここまで来たか、弱虫キモリくん」

「な、なかなかやるじゃん?」

目の前にいるいやな奴にそう言葉をかけられる。

実はあのあと、ボクにぶつかってきた奴らにボクの宝物を奪われてしまったんだ! だから取り返すべく、ボクとアチャモのミホシ

で2匹をここまで追い詰めた。

「さあ、返してもらおうか！」

「こ、こんなガラクタ、好きで盗んだんじゃねー……よ？」

ボクは足を一步踏み出して、かつこよく言い切る。すれば奴も負けじと言い返す。しかし、目の前に迫りくる炎に奴は口をつぐんだ。そして見る間に炎に包まれていった――。ミホシの放った“炎の渦”らしい。

「先手必勝！ キモリ！！」

「ツキミヤだ！！ タネマシガン！！」

ミホシにキモリと言われた怒りにまかせ、タネマシガンで追撃。相手が毒タイプだろうと、毒と飛行の複合タイプであろうと、今のボクには関係ない！

「ちょ、た、タンマタンマー！！」

「わ、分かった！ 返すから、返すからやめてくれ！！」

「大した骨もない奴ら……」

「これが悪う？ よっわっ！」

これで一件落着。

『はい、カット。……だんだん試合場面が過激になってきている気がするんだけど……。』

アドリブで、とは言ったけど、そろそろ可愛そうなんだよね……、彼ら』

薬をつけられ、包帯で巻かれていく涙目の彼らを横目で見るピカ
チュウ監督。ちなみにボクらにケガは一つもない。

『もう少し、優しく出来ない？』

「ムリです」

綺麗に笑って否定するアチャモ・ミホシ。
ボク？ もちろんミホシと同意見だよ。

7th 出会い——収録中（後書き）

出演ポケモン

キモリ

アチャモ

毒ポケモン

毒・飛行ポケモン

クラブ

声のみ

見張り番のあの2匹

8th 主人公とパートナーとの出会い ～その2～（前書き）

もし主人公が一言もしやべれずにいたら？

主人公：ココロ（ロコン）

パートナー：イル（イーブイ）

8th 主人公とパートナーとの出会い ―その2―

雷鳴が鳴り響き、雨がものすごい勢いで降っている。そんななか、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「駄目だ、手を離すな――う、」

「う、うわああ――」

嵐が去った次の日。

『ギルド』と呼ばれる崖の上に立ったプクリンの姿をしたテントの近くに、女の子のイーブイがいた。しばらく網が張られた穴の前でうろついていたのだが、やがて意を決したかのように穴の上に立った。

「ポケモン発見、ポケモン発見!!」

「誰の足形、誰の足形!？」

すると、穴の下からこどもっぽい甲高い声が聞こえてきた。その声と呼応するかのように、低いのにバカうるさい声が聞こえてくる。再び、甲高い声が聞こえてきた。

「足形はイーブイ、足形はイーブイ!」

「ひゃっ!？」

イーブイは突然自分を呼ばれたことに驚き、穴の上から下り、崖を下り、逃げ出してしまった……。

そうしてやってきたのはギルドに通じる長い階段を、まっすぐ下りた先にあるとある海岸。そこにはたくさんのクラブたちが、夕焼けに向かつてたくさんさんの泡を吹いていた。数百個にもなる泡は、オレンジ色の太陽に照らされ、キラキラ輝きながら空中にプカプカ浮かんでいた。

そんな綺麗な場所には不釣り合いなため息を深くつくイーブイ。砂の上に座り込むと太陽にきらめく泡を眺め始める。その顔はどこか悲しそうだった。

「今日もうまくいかなかったなあ」

夕日に向かってか、海に向かってか、ぼつりとつぶやく。そして再びこの場に似合わない、重いため息をひとつついた。

このイーブイの名前はイル。

探検隊になるために、ギルドに弟子入りしようとしているのだが、なかなかうまくいかない。臆病で、怖がりな性格のため、見えぬところからの声にはどうしても恐怖が先立ってしまう。そのため、念願のギルド弟子入りが果たされないでいるのだ。そして、元気が無くなると、決まってこの海岸へと赴き、綺麗な光景を眺めることで元気を体中に満たしている。

やがて、太陽が水平線の向こうへ沈みこみ、あたりは少しずつ暗くなる。そして、その頃になりようやく帰ろうと腰を上げるのだ。

しかし今日は何かを感じたのか、ふと左の洞窟がある方向を見つめた。すると、そこにはなにやらオレンジ色の物体が転がっているではないか。臆病ではあるが、見慣れぬ物体への好奇心は人一倍。ゆっくりとその物体へと近づいて行った。

「……ロコン？」

首をかしげ、きょとんとした表情を作るイル。この付近ではロコンは見かけないポケモンなのだから、当然の反応だ。

「えーと、こういうときは、意識の有無を確かめる！」

目をつむり、ぐったりしているロコンの真横で、何の戸惑いもなく大声を出す。当然のごとく、その声に反応し、三角の耳をピクリと動かしした。

それに気付いたイルは、何を思ったか。いきなりロコンの肩をつかみ、乱暴に揺り動かす。「起きろー」の言葉も一緒に……。

そんなわけで、とりあえず目覚めたロコンだが、足はふらふら、目は焦点を定められないという状態になっていた。

「ちょっと、大丈夫？」

そういう状態に立たせた本人は本気で心配するが、行動に悪気がないため、どうしてもそんな状態になっているのか見当がまるで付いていない。なおもふらふらし続けるロコンを心配そうに見つめていたのだ――。

やがて、意識がはつきりしてきたロコン。自分の居場所と、自分の名前を頭の中で確かめていた。

（ここは砂浜。私はココロ。うん、大丈夫！）

大きくうなずくと、目の前にいる茶色い生き物と視線が合った。丸く黒い大きな目。ピンとたった長く茶色い耳。そして首元にフワフワとある白い綿毛……。つばいもの。大きく茶色い尻尾。そして、茶色い体と4つの足。

ゲームでは7つのポケモンに進化するといわれる超貴重なポケモン、イーブイである事を認識した。

（イーブイって、確か30センチだったと思うんだけど、なんでもこんなに大きいのか？）

「ねえ、大丈夫？ どこから来たの？」

（さっきから話しかけてきていたのはこの子が……。……って、なんで私ポケモンの言葉がわかるの！？）

状況がよくわからないが、心配しているイーブイをひとまず安心させないと。

「~~~~~。……！？」

声を出したはずが、口から出てきたのはかすれた息のみ。どうやら何かのショックで口がきけなくなってしまったらしい……。慌てて、バタバタしているうちに自分の手を見てしまった。

茶色……？

え、茶色？　なんで茶色？

恐る恐るその手を顔のふちに添わせ触ってみる。顔は丸くて、これは耳？　後ろを向けば6つの……尻尾。……ロコン？

「え、ちよつ、大丈夫！？」

意識が遠くなったかと思うと、ぱたりと砂の上に倒れてしまった。イルが何度か揺らしたが、目覚める気配はなし。起きるのを拒んでいるようにも見える。

「……イルが運ぶの？　この子を？」

一瞬、眩暈がしたようだが、しっかりと目を開き、ロコン——ココロを自分の小さな背中に乗せる。そして、もと来た道を戻り、階段を上り、穴の上に立ち、ギルドの中へと入って行った。

ココロは何度か瞬きをして目を覚ます。そこは昨日見た砂浜とは違い、明るいひとつの部屋だった。

（こ、ここは？）

キョロキョロとあたりを見渡す。すると、ヌツという言葉の通りに茶色い顔が無理やり視界の中に入ってきた。

「よかった、気がついた。ここはギルドの中だよ。イル達、ここに弟子入りしたんだ」
「は？」

知らない世界に放り込まれ、知らないところへ弟子入り……。話相手の名前もわからないココロの運命やいかに――。

8 t h 主人公とパートナーとの出会い 〽その2〽 (後書き)

何なんですかね、この話。
続きそうです (笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3577o/>

ポケダン～頭の中でふと芽生えた短篇集～

2011年11月13日16時50分発行